

都道府県別賞一等

僕たちを支えてくれていたもの

香川県 高松市立太田中学校 二学年

土居 瑞輝

僕は、最近反抗期なのか家族に反抗することが多くなってきた。

夏休みになると、家で一緒に過ごす時間が増える。僕の行動を気にする家族がうっとうしく感じる。そんな僕の態度を見て、母が思いもよらないことを言った。

「いつかあなたもこの家を出ていく時が来る。その時は保険証券を持っていきなさい。」

『保険証券？自分の身に関わる保険だろうか。』

母の言葉が続いた。

「あなたはきつと知らないと思う。」

僕はどきっとしたが、母は話し始めた。初めて聞く衝撃的な話だった。

母は、僕がお腹に宿った時嬉しかったらしい。だが、それと同時に自分に内臓の病気が見つかった。子どもは産みたいが、その間に治療をするのは体力的に厳しいし、赤ちゃんに悪い影響が出る可能性がある。しかし、治療を延ばしている間に病気は進行してしまう。最悪の場合、将来的に自分の命を失うことになるかもしれない。

困惑していた祖父母を気にせず、母は

「治療は出産してから始めます。」

と断言したという。その時は元気な子どもを産むことしか考えられなかったからだ。

その時、母の決断を陰で後押ししてくれたのが医療保険というもの。出産には多額の費用がかかる。病院代その他、赤ちゃんを迎えるための準備もたくさんしなければならぬ。もし保険に入っていないければ、出産後すぐに母の病気の治療費までまかなえない。保険に入っていたおかげで、治療費のことを心配しなくてすんだのだ。

その話を聞いて、保険は縁の下の力持ちだと思った。普段そのありがたみを意識することはあまりない。しかし、いざという時に家族を救ってくれる救世主のようなものだ。保険が僕たちを守ってくれていると知って、心強くなってきた。

もし、母が保険に入っていなければ、必要なお金を準備してから治療を始めるのをえなかった。病気が悪化していたら……と思うと恐ろしい。今のよう

第54回中学生作文コンクール

生活はできなかつたかもしれない。そう考えると保険は、母だけではなく、僕も救ってくれたといえる。保険に入っていたことに感謝の気持ちがいってきた。母によると保険は人にすすめられて何げなく入ったそう。当初は、まさか保険にここまで助けられるとは思っていなかっただろう。自分の闘病を通して、保険のありがたみを実感したそう。だから、万が一の時のために子どもも保険に入れておこうと決めた。そういうわけで、僕は生まれて間もない時に保険に入ったそう。

母の気持ちを知り、今までの態度を恥ずかしく感じた。最後に母が僕に言った。「あなたのおかげで私の病気が見つかった。ありがとう。」

母は命をかけて僕を産んでくれた。僕も、

「ありがとう。」

と言いたい。健康に過ごせることこそ幸せだと思った。当たり前前の生活に感謝しながら、日々を過ごしたい。いつか僕も父親になる日が来るだろうか。その時は、必ず子どものためにも必要な保険を用意したい。大切な命をつないでいくためにも。